

です。主日は八日目ごとによつてきます。私たちも日曜日毎に、洗礼の恵みを思い起こし、信仰告白を続けなければなりません。

※キリスト教シンボル図典（中森義宗著）では八は洗礼者ヨハネの数であるとして、洗礼堂の八角形を説明していますが、八とヨハネの関係が分かりませんが、調べてみたのですが、ヨハネは八日目に割礼を受けたとあります。しかし、誕生後の八日目に割礼を受け、名前をもらうのはユダヤの伝統ですので、ヨハネと八を結びつける理由にはなりません。またエルサレム入場後八日目に復活されたので八は復活の象徴であると同書では説明していますが、三日目に復活されたのですから三が相応しい数字に思えます。

※復活祭後の八日間は毎日、特別な典礼でお祝いしますが、オクトーウアは降誕や、聖霊降臨にも行われています。オクトーウアという八日間は、どういう意味があるのでしょうか。疑問はつきません。

芸術 復活のローソクに描く

～マリア 平川栄美子さん～

復活の徹夜祭に、ローソクにAとΩが刻みこまれ、祝別された火が灯されます。その復活のローソクに、桜の花が描かれているのをご存知ですか？実はこの桜は平川栄美子さんが描かれたものなのです。皆さんは、女子パウロ会などで作られた復活のローソクを購入したものだと思っておられたことでしょうか。そのほか洗礼式の時、いただくローソクの絵も平川さんが描いておられます。

昔から絵が好きだった平川さんは、トールペインティングを四年程前から習い始め、オランダ・ザンズ・フォーク・アートという木靴や家具などに装飾として描く伝統技術を取得され、主に木製品に描くのを得意とされています。

トールはフランス語でブリキを意味し、ハンドバッグとか眼鏡ケースなど画布以外の物に、装飾として描く技術をトールペインティングと言います。ヨーロッパではじまり、移民によってアメリカに渡り、自由な発想と新しい文化の影響を受けて技術も発達し、最近では水性アクリル絵の具の普及により、日本でも勉強する人が多くなったようです。



ストロークといって筆の動かし方が基本で、これをまずマスターしなければなりません。平川さんは丸筆で、描き直しが出来ない一筆描きをしておられます。筆の角度、水の含ませ方で、グラデーション（ぼかし）まで出来るということです。このように、集中力とストロークの技術が作品の評価を左右します。一度、祭壇の前にある復活のローソクを鑑賞していただけたら、その美しさと技術の確かさに驚かれると思います。

（後藤 明憲）